九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

告知に関する死生観の比較研究 ： 韓国人学生と日本人学生の場合

丸山, マサ美
九州大学大学院医学研究院保健学専攻講師

https://doi.org/10.15017/13321

出版情報：九州大学アジア総合政策センター紀要. 2, pp.35-42, 2007-09-28. Kyushu University Asia Center
バージョン：
権利関係：

告知に関する死生観の比較研究
── 韓国人学生と日本人学生の場合 ──

A Comparative Study about Views on Life and Death in terms of Truth-telling
── Between Korean Students and Japanese Students ──

丸山 マサ美
(九州大学大学院医学研究院保健学専攻講師、医学博士)
MARUYAMA, Masami
(R.N. Ph.D, Assistant Professor, Department of Health Sciences, School of Medicine, Kyushu University)

Abstract

This study compared thanatology between Korea and Japan by consciousness survey regarding truth-telling on students in Korea (Seoul) and Japan (Fukuoka) from December 4 to December 25, 2006. We investigated ideal care of the patient and their family required in terminal care as well as disclosure of medical information, "living will" and "advanced directives". As a result of this survey, 38% of Korean subjects, 87% of Japanese 92.78% of German subjects desired truth-telling to themselves and their family (Maruyama 2000).

To clarify the tendency of thanatology, 5 factors：right, preparation, family, self-determination, and confidence, were investigated in subjects who desired truth-telling,while factors, not desiring to watch being watch, after being watched, are, and consideration, were investigated in subjests who did not desire truth telling. For those subjects who did not desire truth telling, five factors were investigated; not desiring to be watched. However, the percentages of subjects who desired truth-telling to themselves but not to their families were 55% in Korea and 4% in Japan (Fig.1).

The following reasons were common between the two countries: they do not want to see their family give trouble. Although there were big difference in the results, the reason given by the subjects were strikingly common. Both subjects responded that they do not want to give trouble and suffering to their families.

Although it has been generally regarded that East Asian countries share a 'common culture', this research revealed the different attitudes in facing truth-telling in two countries. Our understanding of the "life and death" issues should be deepened and enriched through further empirical research which encompasses national boundaries. Only through rigorous collaborative research among the scholars in East Asia, we would be able to develop mutual understanding and solutions to our common problems.

Key words : 告知 (truth telling)、死生観 (thanatology)、
韓国人と日本人の比較 (comparative study between Korean and Japanese)

１．緒言

各人にとって、必然的にやってくる「死」をどのように受容するかは、人々が、自己の「生」を主体的、積極的、肯定的に捉え、その「生」を全うする上でも必要なことだと考えられる。死の受容は、死生学（thanatology）の中心に位置する問題であり、死の臨床的場面における心理学、死に関する哲学的思考、宗教学、各人の死生観など、さまざまな分野から成立している。

特に、死生学の目的は、死を理念的に考察することではなく、死に関して抱く個人の感情ないし偏見に対応する能力を養うことにあり、教育を通して、死を身近なものと厳粛なものと捉

えるように導き、一人一人の死生観を築こうとすることに主眼を置く事である。

告知に関して、個々人がどのような死生観に基づいているか、自己についていかなる生と死のあり方を望んでいるかをより良く理解するための視点は、単に医学的側面のみならず、心理学、社会学、哲学、倫理学、人間学、文化人類学、教育学など、多様な学問領域による学際的考究によってのみ開かれると考えられ、さらには、人々の死生観は、各人の生活する社会のあり方、その文化的状況、慣習や伝統、また、そこにおける主要な宗教観、世界観によって規定されていることが想定される。しかしながら他方で、「人間の死」という現象そのものについての考え方や捉え方は、異なる社会に生活する人々の間では、その判断理由に相違（丸山他、2000）が見られ、その差異こそ、社会的に規定された死生観を示すのではないかと考えられる。

本稿は、告知に関する韓国人学生と日本人学生の各国固有の文化、社会的に規定されている死生観について概観するものであり、その差異から、社会的に規定される死生観を模索するものである。

２．研究目的

本研究では、そこに生活する「人間の生と死」に各国固有の概念、あるいは捉え方があるのではないか、特に、日本人は弱い自分をみられたくない（北山、1993）という民話にも見られる日本人独特の感性があり、各国固有の「人間の生と死」に関する固有の概念を比較検討する事を目的とした。

「告知」は、自己の生命に生じている出来事を受容し、自らの死を覚悟する上で大きな役割を担い得るものである。ここでは、「告知」が実際に当事者に望まれるか否か、また、それがどのような理由から望まれるか、否定されるかを調査した。

３．研究方法

本調査票には、余命が予測できる悪性の癌の場合と条件を指定した上で、韓国人学生と日本人学生に対し、意識調査を行った。特に先行研究[1、2、3、4]から、自分自身と家族に対し、余命告知における理由選択を明確にするために、告知を望む場合と望まない場合の異なるタイプの調査票を用意した。

告知を望む場合、その選択理由として、権利・準備・家族・自己選択・信頼の５つの要因（カテゴリー）に着眼し、また、告知を望まない場合、その選択理由として、見ることを望まない・見られることを望まない・見られた後・配慮・察する、５つの要因（カテゴリー）に着眼した。各項目については、２つの質問項目をあげ、それぞれについて５段階で評価を求めた。

これらの調査結果より、そこに生活する人間の生と死に各々固有の概念、あるいは、捉え方があるのではないかとの仮説を立て、その共通点、相違点の比較から、死に関して抱く個人の感情ないし、偏見に対応する能力を養うこと、ひいては、医療現場における基本原理である患者の自己決定の尊重 (Respect for Autonomy)、情報開示 (disclosure of medical information)、“living will”、“事前指示 advanced directives”のあり方について模索するものである。

【研究期間】

調査は、平成18年12月４日～12月25日、調査票を用い、韓国（ソウル市）と日本（福岡市）に生活する学生を対象に行った。調査対象の内訳はソウル市Ｔ大学現代日本語選択の学生29名（平均年齢18.9歳）と福岡市Ｋ大学医学部保健学科の学生24名（平均年齢22歳）である。まず、調査に関する説明と倫理的配慮として、韓国においては、調査の目的とその意義について、現代日本語専攻の学生に韓国語で説明が行われ、書面にて同意を得た。研究への参加は自由意思とすること、調査拒否の自由、また、調査協力を中断した場合にも、何ら不利益を被ることのないこと、調査内容に関する個人のプライバシー保護がなされること、そして、調査内容は、研究以外の目的には用いられないことを約束した。また、調査票は、個人を特定できないように処理が行われ、その結果については、学会や学術

1 北山修：見るなの禁止、岩崎学術出版、1993年
2 保坂隆：がん告知は QOL を向上させるか、現代のエスプリ371. 至文堂、1999年６月、pp.129-136
3 宗像恒次：行動科学から見た健康と病気、メジカルフレンド社、1998年、p.255
4 山崎友子・堀川直史・信田広晶他：未告知患者に見られた反応性、総合病院精神8巻99号、1996年

雑誌に報告することを説明した。

【調査票の特徴】

本調査の特徴は、自分と家族の立場に回答を求めたことと、告知を望む場合と望まない場合と、望む／望まない程度を５段階評価：１.弱く望む（望まない）２.やや弱く望む（望まない）３.普通（望まない）４.やや強く望む（望まない）５.強く望む（望まない）にあった。

４．結果と考察

本調査の結果は、調査数の少なさからも、告知に関する韓国人学生と日本人学生の各国固有の文化、社会的に規定されている死生観について概観するものであり、その差異から、社会的に規定される死生観について、安易に一般化されうるものではない。しかし、選択された二国に共通する理由については、韓国人学生と日本人学生に共通する価値観と捉える事ができるだろうし、また、二国の相違の理由についても、「人間の死」に関する固有の概念、あるいは、捉え方であろうかと考えられた。

１）告知への態度

告知への態度として、自分・家族に告知を望む者は、日本（日本87%・韓国38%）に多い。2000年の調査結果、日本人法学生（福岡市）とドイツ人法学生（ハイデルベルク）を対象におこなった調査結果（丸山他、2000）[5] と比較すると、専門分野の異なる学生ではあるが、日本人学生の態度は、韓国人学生よりドイツ人学生に近い（図１参照）。

韓国人学生は、自分に告知を望むが家族に告知を望まない者（韓国55%、日本４%）が、多い（表１参照）。その理由として、韓国人学生は、年長者を敬う儒教的価値観が強い事から、自分に告知を望むが、家族には、告知を望まないのではないだろうか。今日の日本人学生には、そうした儒教的価値観が弱まっているのだろうか。

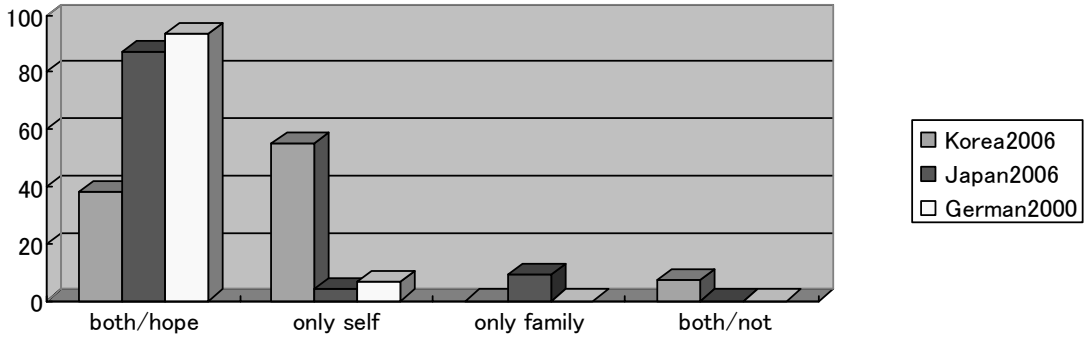


図１　告知に関する態度結果（2006韓国・日本、2000ドイツ）

表１　韓国人学生と日本人学生の告知に関する態度結果

	自分・家族告知を望む(%)	自分に望むが家族に告知を望まない（%)	自分に望まないが家族に望む(%)	自分・家族望まない(%)
韓　国	38	55	0	7
日　本	87	4	9	0

5 丸山マサ美、安藤満代、松尾智子：告知に関する死生観の比較研究、生命倫理10巻１号、pp.100–110、2000年

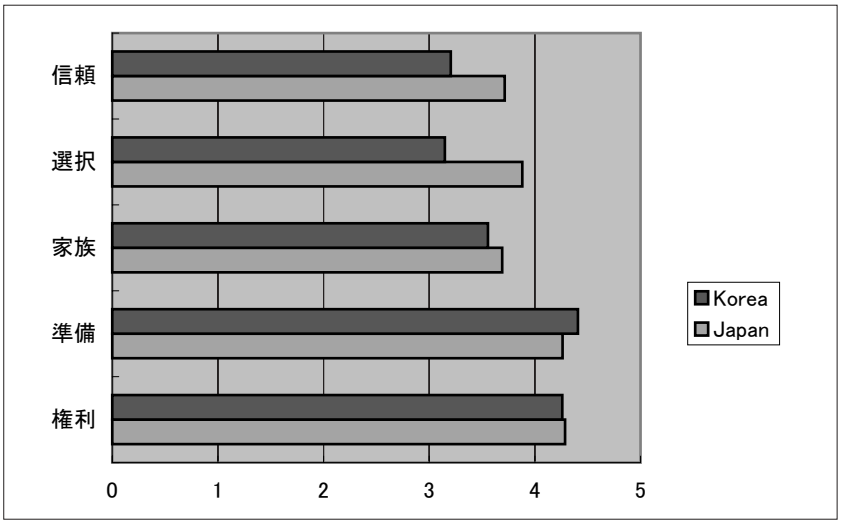


図２　自分へ望む理由（韓国人学生・日本人学生）

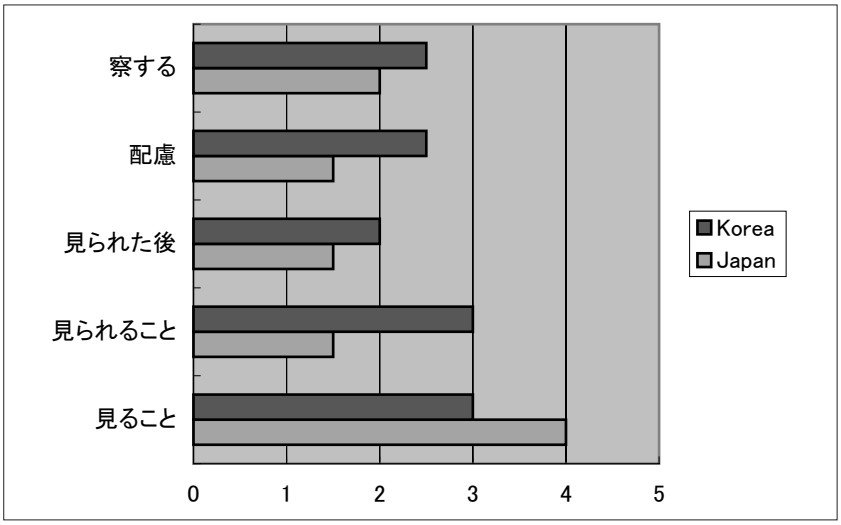


図３　自分へ望まない理由（韓国人学生・日本人学生）

２）告知を望む理由

告知を望む理由『準備』・『権利』において、両国の共通点があった。『死に対する準備の時間だから、やり残したことをする時間が必要だから』といった理由が、準備に関する選択理由であり、『自分自身の体・人生だから、知るのは自分の権利だから』といった理由が、権利に関する選択理由である。両国の学生には、自己の健康状態を知ることについての強い権利意識が窺える（図２・図４参照）。この点は、ドイツ人学生・日本人学生（丸山他、2000）調査結果においても同様であった。

また、両国の相違点としては、韓国人学生は、自分に告知を望むが家族に告知を望まない（表１参照）。標本数が少ない事から、統計学的根拠に乏しく、多くを言及する事はできず、本研究は、探索的研究にとどまり、さらなる議論が開かれているものである。先の結果において、ドイツ人学生と日本人学生（丸山他、2000）の相違点として、日本人学生の調査結果には、

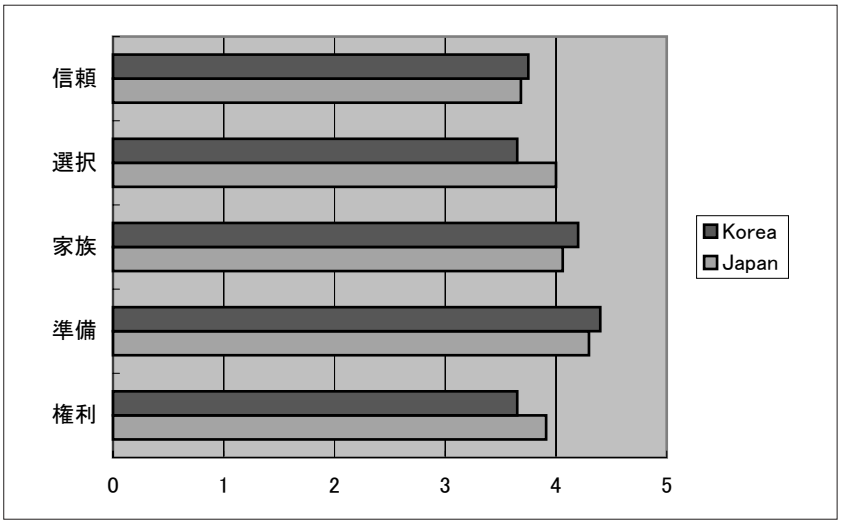


図４　家族へ望む理由（韓国人学生・日本人学生）

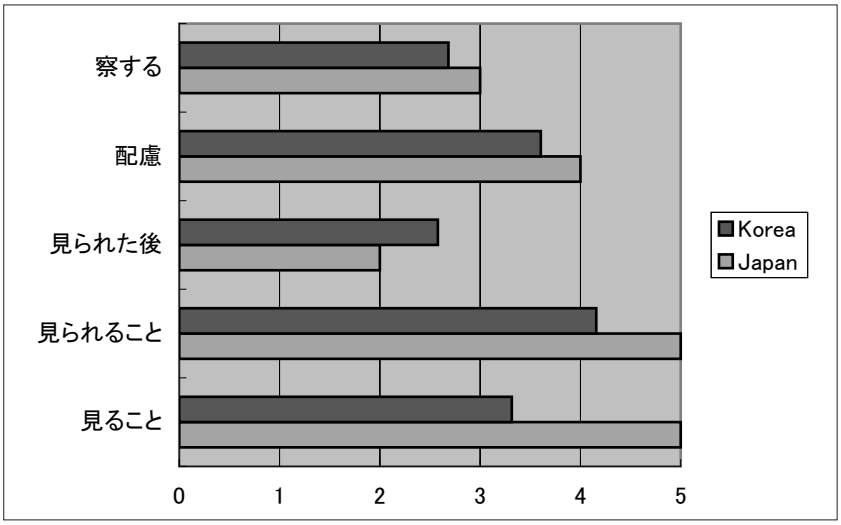
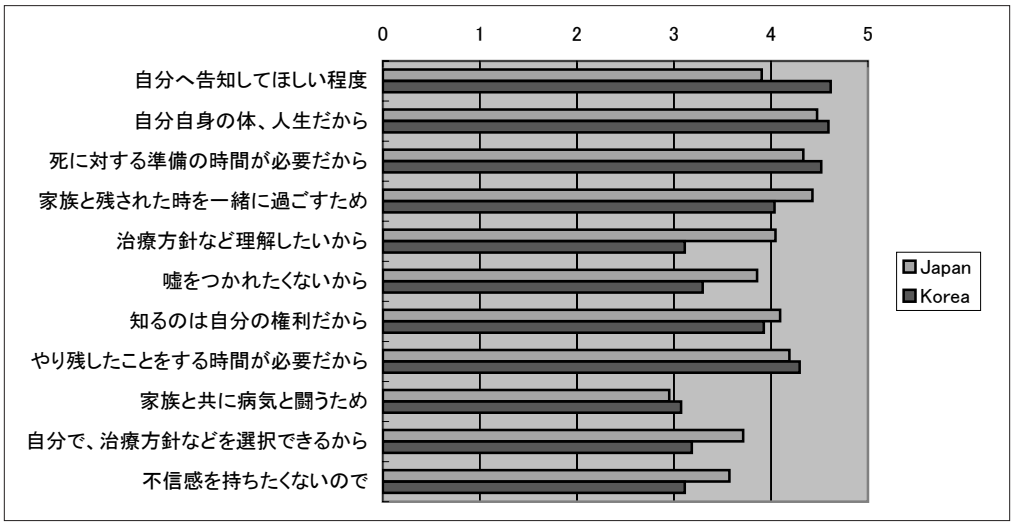


図５　家族へ望まない理由（韓国人学生・日本人学生）

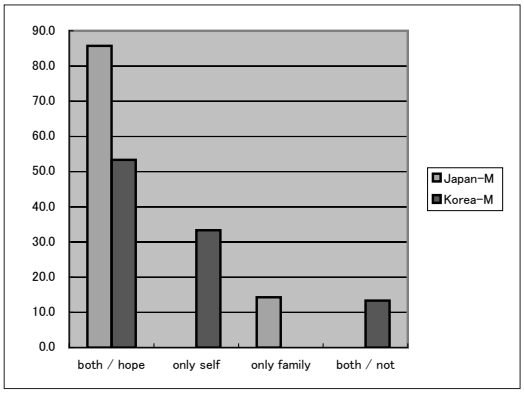
「見る（look）こと」・「見られること」・「見られた後」といった日本人独特の感性とも言える弱い自分を見られたくないとする（do not look）特徴的な行動が見られた。今後は、告知を望まない５要因（見られること、見られた後、配慮、察する）については、各項目間（図３・図５参照）の信頼性・妥当性の検証と、告知を望む・望まない要因の今後さらなる要因の分析を進める必要がある。

また、自分への告知理由において、統計学的に有意差（$p<0.05$）のあった項目には、選択・信頼があった。『治療方針など理解したい、自分で治療方針などを選択できるから（0.91）』が、選択における理由であり、『嘘をつかれたくない、不信感を持ちたくない（1.88）』が、信頼における選択理由であった。特に、日韓での調査において、有意差（$p<0.05$）のあった自分に告知してほしい理由は、「治療方針など理解したい（0.80）」といったものであり、医療を受ける前の事前の安心と受けた医療に対す



n＝21（Japan）　n＝27（Korea）

図６　自分への告知希望の程度と理由



n＝14、n＝7

図７　男子学生（韓国・日本の比較）

n＝15、n＝16

図８　女子学生（韓国・日本の比較）

る事後の納得（結果責任）、すなわちインフォームド・コンセントの重要性が示唆される結果(図６参照）であった。

今後、告知に対する男子学生と女子学生の意見の相違（図７・図８参照）から、家族における男女の役割・意識が窺える。また、男子学生、女子学生の考え方の特徴が、個人、家族、社会における立場の相違によって違いがあるのかといった性差による各国の死生観の特徴を分析する事で、「人間の生と死」に関する固有の文化、社会に規定されている要因が明確になるのではないかと考えられた。

３）告知を望まぬ理由

各国では、家族に告知を望まぬ理由において相違（表２・表３）があり、各国固有の「人間の死」に関する意識の差ではないだろうか。韓国の学生は、家族に告知を望まないとする考えが多く、『家族がショックを受けるのを見たくない、家族が悲しむのを見たくない、家族に余計な心配をさせたくない』理由を選択していた。一方、日本においては、家族にも自分自身にも、告知を望まない理由に相違が見られなかった。

但し、日本人学生における告知を望む理由については、死に対する準備時間、家族と残された時間を過ごす、やり残したことをする時間と

表２　告知を望む理由・望まぬ理由（日本）

	家　　族	自　分　自　身
望　む 理　由	全て（除外項目　以下２項目） ・嘘をつかれたくない ・不信感をもちたくない	・自分自身の体、人生 ・知るのは自分の権利 ・死に対する準備時間 ・家族と残された時間を過ごす ・やり残したことをする時間
望まぬ 理　由	・真実を知るのが怖いだろう	・真実を知るのが怖い ・ショックを受け絶望すると思う

表３　告知を望む理由・望まぬ理由（韓国）

	家　　族	自　分　自　身
望　む 理　由	全て（除外項目　以下２項目） ・嘘をつかれたくない ・不信感をもちたくない	・自分自身の体、人生
望まぬ 理　由	・家族がショックを受けるのを見たくない ・家族が悲しむのを見たくない ・家族に余計な心配をさせたくない ・ショックを受け絶望するだろう	・ショックを受け絶望すると思う ・自分が悲しむのを見られたくない ・家族に余計な心配をさせたくない

表４　両国の告知を望む理由・望まぬ理由

		共　通　点	相　違　点
望　む 理　由	韓　国	・自分自身の体、人生	
	日　本	・全て同じ理由 (家族の場合)	・知るのは自分の権利 ・死に対する準備時間 ・家族との残された時間を過ごす ・やり残したことをする時間
望まぬ 理　由	韓　国	・自分自身がショックを受け絶望するだろう	・家族がショックを受けるのを見たくない ・家族が悲しむのを見たくない ・家族に余計な心配をさせたくない
	日　本		・真実を知るのが怖いだろう ・自分自身が真実を知るのが怖いだろう ・自分自身がショックを受け絶望するだろう

いった、死が近づいている状況において、患者自身がその残された時間をどのように過ごしたいと望んでいるか（死生観）を考察し、人生を全うするという視点からすると、病名告知が強く求められていることを明らかにしているのではないだろうか。同じ理由から、いつか必ず訪れる死を我々が冷静に受け止め、残された時間を有意義に過ごすためにも、自己と家族の生と死について考えること、また、告知を行い医療者側もその意向を尊重する必要がある。各人が満足した生を送るためにタナトロジーの重要性の自覚とその普及が求められる。

５．今後の展望

本調査は、自己について、いかなる生と死のあり方を望んでいるかをより良く理解するための視点として、韓国と日本に生活する人間の生と死に各々固有の概念、あるいは、捉えるために、「告知（truth telling)」に抱く個人の感情や「人間の生と死」に対する各国の固有の概念を知る手がかりとした。

特に、韓国人学生の親を想う感情は、今日の日本人学生に比較すると儒教的思想が強い傾向にあると判断される。学歴社会に対する教育と社会階層は、両国における学生における共通の現実として目の前にあるが、本調査の相違点(表４参照）は一体どのように解釈できるのだろうか。

今後は、各国の医療現場における生命倫理の基本原理：自己決定の尊重（Respect for Autonomy)、情報開示（disclosure of medical information）の現状、“living will”、“事前指示 advanced directives”のあり方と共に、各国の医療現場における医療専門職者の各専門家の立場、役割に着目し、患者中心の医療のあり方を模索する必要がある。また、そこには、医学的側面のみならず、多様な学問領域による学際的考究と膝を合わせた場面における討論から新たな視点が生まれて来るものと考えられる。

韓国、日本は、東アジアにおける隣国であり、『儒教』、『漢字』といったさまざまな文化を共有する国家である。今後、さまざまな角度からの各国固有の「死生観」をてがかりとして、東アジアの相互理解、相互協力のための下地となる実証的研究が期待される。

謝　辞

研究に際し、貴重なご意見・ご協力を賜りました東國大学校　日本学研究所　呉錫崙教授に深謝申しあげる。

[本報告は、日中韓シンポジウム第２分科会：医療・生命倫理において発表した内容に、加筆・修正をしたものである。]

参考文献

１．Warren Thomas Reich (1995) *Encyclopedia of Bioethics; DEATH EDUCATION*
２．Tom L. Beauchamp & James F. Childress (2001) *Principles of Biomedical Ethics, Fifth Edition*
３．北山修『悲劇の発生論』金剛出版、1997。
４．岸本英夫『死をみつめる心』講談社、1967。
５．相場朝江他、死の意識・態度に関する研究第１報、『死の臨床』16巻２号、1993。
６．庄司進一／河野友信（編）「ターミナルケアと教育」、『現代のエスプリ』至文堂、1991年１月。
７．有田伸、『韓国の教育と社会階層 ――「学歴社会」への実証的アプローチ ――』東京大学出版会、2006。
８．河合隼雄『家族関係を考える』講談社現代新書、1980。